

# 藤並の森

Vol.33



## リレー随筆

### 同人誌の青春

嶋岡 晨

同じ明大の親友三名だけで、詩の同人誌

「蘿」を始めたのは、昭和二十八年。翌年、後輩片岡文雄や早大の笛原常与が加わるが、小人数の同志的結束はしばらくつづいた。

半年ほど早く「櫂」が創刊され、川崎洋、茨木のり子、吉野弘らのその少数精銳主義が手本になつた。

同人誌の理想的パターンは、氣心も知れ思う方向がほぼ一致する仲間らと連携し刺激しあいつつ、同人誌独自の魅力を醸すいい作品を展示することか。単なる許容でなく互いの個性を支えながら「青春」性を証す情熱はもちろん、中心的存在の磁力が当然求められる。でないと我的強い連中の結束は無理。

わたしなどは、反省すべき点が少なくなかつた。友情の甘さ、不純な抱擁性、緩い連帯感ゆえ、同人誌がふえ、けつか数次の分裂・再編があり、なし崩しに「蘿」は消滅した。

組織の肥大化は老化にひとしい(とはいえた岡文雄の「まわ」)。片岡文雄のような稀な詩人を世に送ったが)。高知の詩誌でいえば、「蘇鉄」あたりにも似た面があつた。詩史上著名な「歴程」「地球」などの、雑居マンション的弊害にもそれはいえる。旗色の曖昧化、独善的ナルシシズム、帰属

エリート意識……。

同人誌における持続の困難は、単に経済的問題ではなかつた。サッカーの

中田英寿が引退声明の中でいつたこと、「子どものころのボールへの瑞々しい思いが失せた」。これは長続きしているだけの同人誌にもいえる。昭和二十年代から三十年代にかけての、詩誌の離合集散は激しかつたが、それだけ同人らにも純粹な厳しい願望があつた。

同人誌無用の一匹狼もりっぱだが、同人誌仲間としか共有できない喜びもあり、才能と好運への賭け、その心意気あつてこそその共同母胎の陣痛がもたらす感激。その純度が問題なのだ。泥臭くとも「一将功成りて万骨枯る」は承知の上、内部破壊に到るほどの熱烈な文学的交遊を試みるのも、また同人誌にしかない、いわばアンチ・エイジング的「青春」性の証、無類の幸せかもしれない。

林嗣夫の「兆」、猪野睦の「花粉帶」、

大家正志の「SPACE」、河上迅彦の「風土」、その他、高知の詩誌・文芸誌を今、手もとに眺めながら、現実の年齢を越えた「青春」の意味を考えている。(詩人)

展覽會紹介  
Exhibition

# 高知の文芸同人誌展

平成18年  
10月1日(日)  
▼  
12月17日(日)  
文学館ホール  
観覧料350円

秋から冬にかけての企画展は、高知の文芸同人誌を取り上げます。今回(文芸同人誌の歴史)と次回(高知の戦後の状況)の二回に分けて紹介いたします。

文芸同人誌とはいつたいどのようなものでしようか。あらためて問い合わせられると簡単に答えはできません。

辞書を引いてみると「同人」は「同じ目的や趣味を持ついる人。同好人。」(『大辞林』)とあります。文学には小説や詩、和歌、俳句、川柳、短歌など様々なジャンルがあり、その評論もありますから同人誌も同じくらい幅広いものです。

また、同人誌の規模も様々で、多くの人が集い大部数を印刷するものから数人で回覧するものまであります。共通しているのは、集う人々が雑誌の経費を負担して発行していることでしょう。

同人誌の始まりは明治前期にまで遡ります。最初期のものとして一八八五(明治十八)年に発行された「我楽多文庫」が挙げられます。尾崎紅葉、山田美妙らが集まり作つた結社「硯友社」の機関誌的な性格を持ち、誌面は文学愛好者の文章研鑽の場で、特に共通の主義主張があつた



戦前の高知関係の文芸同人誌のひとつ。  
田中貢太郎を囲むグループ誌として始まり、新人へ執筆の場を提供したり、文壇の権威とは無関係に文学者や文化人が集い、交流の場となつた雑誌。

わけではありませんでした。小説、詩歌、川柳、都々逸、戯曲、評論とあらゆる分野を網羅し、投稿した者で回覧し、自由に批評するという方針は、大きな反響を呼んで同人も増え、最初は手書きの筆写本だった雑誌も第9冊目以降は印刷本へと変わり、明治前期の文学の中軸をなす作家を次々と輩出しています。

一八八九(明治二二)年には、森鷗外が中心となつて「しがらみ草紙」が創刊され、九一(明治二十四)年には坪内逍遙が中心となつて早稲田大学文科の文芸雑誌「早稲田文学」が創刊されています。この二つの誌上で九一年(明治二六)年に

明治期の文芸同人誌は、その後の同人誌の傾向を良く現していると言えるかもしれません。一つは、文学愛好者同士、または師弟で自らの研鑽や楽しみのために発行するもの、また一つは、同じ主義主張を持つ者が同人誌に集うというもので。こうした同人誌の活動の中で既成の文学に異を唱え、文学が発展してきた面もあります。初期浪漫主義運動が展開された「文学界」、後期浪漫主義の「明星」、新浪漫主義の「スバル」、新理想主義の「白樺」など、大正時代の文学が個性的な充実を見えたのはこれら同人誌の盛況と無関係

かけて交わされたものが「没理想論争」です。イギリスの文学を基にした坪内逍遙の「写実主義(没理想)」をドイツ留学から帰朝したばかりの鷗外が低次元の文学であると批判し、これに対しても逍遙が近代文学は写実主義によって理想(浪漫)を排除することが本流である、と反論した文学論争でした。この論争は後の文学の二つの大きな思潮——リアリズムとロマンティシズムの流れの最初のものとして注目される論争です。

大正末期には「山蘿」、「青空」、「辻馬車」、「朱門」、「街」などの有力誌が揃い、同人誌全盛時代となります。新進作家や評論家を数多く輩出し、文壇の予備軍的な役割を果たし、また、新しい文学の様々な試みがなされました。しかし、時代は戦争へと向かい同人誌統合等による停滞を余儀なくされることとなります。(次号34号へ続く)

(学芸課／川島郁子)

## 嶋岡晨氏記念講演会決定!! 「同人誌の青春」

日時: 平成18年10月8日(日)

午後2時~3時半(開場1時半)

場所: 高知城ホール4F

定員: 150名

参加: 事前に電話でご予約ください。

お申し込み088-822-0231

聴講: 無料



といえません。

大正末期には「山蘿」、「青空」、「辻馬車」、「朱門」、「街」などの有力誌が揃い、

同人誌全盛時代となります。新進作家や評論家を数多く輩出し、文壇の予備

展  
紹  
覽  
介  
會

Exhibition

# 宮尾登美子の世界IV 作家への道のり～「村芝居」「連」習作の数々～

平成18年  
9月15日(金)

▼  
10月29日(日)  
常設展示室2  
観覧料350円



『クレオパトラ』特装本と  
ヒエログリフの印章

当館では、昨年十二月、宮尾登美子先生から直筆原稿約二〇〇点を含む資料六〇〇点以上をご寄贈いただきました。そこで、本年は、「テーマ展」五回を含む「寄贈記念展」を開催いたしております。

九月十五日（金）からは、テーマ展「宮尾登美子の世界IV」（作家への道のり～「村芝居」「連」習作の数々～）と題しまして、先生が三十六歳の時、婦人公論女流新人賞を受賞した『連』を中心にして、この作品のもとになつたと思われる「真珠」の原稿や、作家として脚光を浴びる以前の習作原稿の数々を展示し、作家として成功するまでの歩みをご紹介させていただく予定です。

この頃の作品には、「おうま繚乱」「貧乏感慨」「珊瑚彫り師」「五台山」テレビドラマ「賤機帶」などがあり、土佐を舞台に描かれているのが特徴です。これらの作品群から、土佐という一地方から、飛び出す事のできないものかしさを感じながらも、執筆を続けている宮尾先生の様子が窺えます。

引き続き、テーマ展「宮尾登美子の世界V」は、十一月三日（金）～十二月二十六日（火）の会期で開催いたします。（大作「錦」と「みつめる昭和八十年」）

最新の宮尾文学～」をご紹介させて頂く予定です。宮尾先生は、今年の五月から中央公論に「錦」、今年から毎日新聞に「みつめる昭和八十年」を連載されています。

展覧会では、先生からご提供いただき資料をもとに、これら「錦」や「みつめる昭和八十年」など最新の作品群を中心にお紹介する予定です。八十歳をむかえられ、ますます、筆冴える、宮尾文学をご堪能いただることと思います。



「真珠」の原稿

## 今まで開催の宮尾登美子資料寄贈記念展

■一月七日（土）～二月二十八日（火）  
宮尾登美子の世界I  
宮尾本平家物語から『義經』へ  
～宮尾文学における華麗なる女性たち～

寄贈資料の中から三六一八枚という宮尾本平家物語や『義經』の原稿などを展示。宮尾文学における新たなる女性像を中心にご紹介しました。

■二月四日（土）～五月十四日（日）  
宮尾登美子の世界II  
直木賞受賞作『一絃の琴』を中心にして  
水のように流れる一絃琴の音色とともに、土佐の風土と因習の中で生きる、儂くも切ない、一人の女性奏者の生き様を中心にお紹介しました。

■五月二十日（土）～六月三十日（金）  
宮尾登美子の世界III  
自伝的作品四部作  
～権「春燈」「朱夏」「仁淀川」、

太宰治賞を受賞した「権」をはじめ、『春燈』『朱夏』『仁淀川』には、宮尾先生をモチーフにした主人公「綾子」二十六歳までの、波乱の人生が描かれています。先生はご自分の半生を赤裸々に描くことにより、作家として認められました。これらの作品を通して、宮尾文学の原点にふれていただけたと思います。

また、「宮尾文学のふるさと」と題した、昭和初期の地図と四部作の中から抜粋した文章で、高知を紹介した巨大なパネルの前には、多くの来館者が足を止めていました。（学芸課／津田加須子）



愛用のルーペと刺繡の指輪

文壇の第一線で活躍する宮尾先生の作家としての軌跡と、珠玉の作品群を寄贈いただいた資料の中から約二〇〇点を厳選し大々的に紹介。特に「きのね」「天璋院雛姫」などの初公開の資料は、来館者の目を惹きつけていました。

先生から直筆原稿約二〇〇点を含む資料六〇〇点以上をご寄贈いただきました。そこで、本年は、「テーマ展」五回を含む「寄贈記念展」を開催いたしてあります。

## 土佐文学さんぽ

文学館で文学雑誌の展示計画がすすんでいるが、戦後六〇年のあいだ高知でどんな雑誌がでていたらうか。同人誌をだしていくことは文学青春であり、その同人たちにとつては生涯を打ちこんでゆく文学行為だつた。

そんな人たちが高知の戦後文学をつくりあげてきた。その雑誌をみていくことは、高知の戦後文化を、文学の流れをたどることにもなるう。

今年も七月上旬、高知市役所入口には一九四五年七月の米軍空襲によつて焼き払われた高知市全図写真が展示されたが、戦後の高知文学の出発もその焼跡からだつた。だが戦後も六〇年をこえると、あれこれの人、文学をつくりだしてきた人、引き継いできた人、雑誌なども忘れられていく。だれが中心だったのか。メンバーはどうであつたか。どこに集い、どんな議論があつたかも遠い昔のことになつていて。

その記録、回想はまとめられてきたろうか。そろそろこれらの人で綴る歴史、交流史といったものもたれかの手でまとめられていいのではないか。  
ぼくの世代が文学にとりつかれていく時代は、戦後、焼野原だつた高知市にも復興が始まり、あちこちにバラックが建ち、帶屋町も未舗装の大通りで木造二階の店が並んでいた時代だつた。そこ帽子店でハンティングを買ってかかるのが、当時の流行だつた。

## 猪野 瞳

戦後十年近くたつていたらうか。詩をかいだいたぼくらに伝わつてくるのは、戦後まもなく宮地佐一郎らによつて「詩座」が発行され多くの同人誌が発行されいく熱氣だつた。そんななか伝説的なゴシップも聞こえてきていた。戦後、宮地佐一郎と詩人の翁田朱門がハリマヤ橋で、美女をめぐつて大立ち回りをしたという伝説だつた。

宮地佐一郎はその後上京し、作家となり直木賞候補にもなるが、やがて坂本龍馬研究の第一人者となつた。翁田朱門も同じく上京し、詩人沢村光博としてH氏賞をうけた。翁田朱門という、いかにも近よりがたいペンネームに皆おそれをなしたが、後年、高知である小さな出版記念会があり、そこへ帰郷して初めて出会つた。そのとき物静かなクリスチャンであつたことに改めて驚いた。果してハリマヤ橋での大立ち回りは、だれかが流した話がふくれ上がつた風評であったのか。二人とも鬼籍である。

やがて一九五〇年代になると「砂時計」がでた。そして「昼夜」がでる。本格的な同人誌の始まりだつた。そのあと「高知文芸」「高知作家」「山河」などがでる。  
一九六〇年代になると嶋岡晨、小林一平らの「潜行」「人間像」、土佐文雄らの「蛇紋岩」などがでた。嶋岡晨は東京へ帰り「すばる」に「裏返しの夜空」をかけて芥川賞

候補となり、土佐文雄は「るねさんす」にかいた「お前の窓」が、深沢七郎が「櫛山節考」で第一回中央公論新人賞をとつたあと的新人賞候補にあがつた。

一九六〇年代高知の同人誌は、地方の文学修業の場であつた。  
詩誌も「詩座」につづき「南海詩人」「蘇鉄」「心象」「骰子」擲「南方浪漫派」「ランプ」「歯車」「さぼてん島」「花冠」「三角旗」「LE NOIR」その他多くがでて、それぞれの主張を競いあつた。

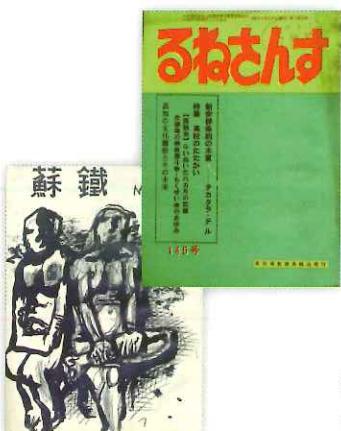
高知の戦後詩の社会派、モダニズム派の戦後詩をきり開こうとした姿が、これら詩誌からは読みとれる。

いずれにしても高知の文学の文学雑誌展示企画はありがたい。刊行の現物には戦後のガリ刷りもあり、ゆつくり半世紀を味わうことができよう。これも一堂がみわたせる文学散歩ではあるまい。

その中で感じたのは、これだけの作家が高知にいることを広く知らせる責務が文学館にはあるのだといふことでした。一人一人の作家の人生や作品に込めた思いを伝えるためには、作品を読み込み、関係者の話を聞き、資料を集め研究するという、当たり前だけれども奥深い作業に熱意をもつてあたらなければなりません。そのあもしろさがあおろげながら分かりはじめた今の私は、作家のことをもっと理解したいといふ思いを胸に、日々の仕事に取り組んでいます。

そして、それをいかにお客様にお見せできるのかが次の課題です。平成19年11月には開館10周年を迎える当館は、来春に常設展示のリコーアルを予定しています。どんな展示になるのか私自身楽しみにしながら準備を進めていきますので、皆様も、今後の文学館にご期待ください。

## 学芸員メモ



(詩人)



(間城彩佳)

新コナ  
誕生！

文学館で紹介している  
約40名の文学者を毎回  
2名取り上げ、展示資料  
のエピソードも交え  
ご紹介します。  
下の実線部分を  
切り取って別に綴じて  
みてください。  
5年後には  
「常設展作家ミニ事典」  
となります。



## 館長室から

### 高知県立文学館の評価について

前田 英博

高知県立文学館は、平成9年、6年余りの歳月をかけ議論された後、県民一人ひとりが文学に親しむことにより、心を豊に育み、心に余裕を持った生活が出来るようになることを期待し設置された。

現在の荒廃した社会の中で、真の心の豊かさや余裕が必要とされる時代となつたが、心を豊かにするためや余裕を持つために文学が果たす役割は非常に大きなものがあり、その文学への誘いの場としての文学館は、心を養う県民の生涯学習の場として大きな存在意義がある。

文学館の仕事としては、常設展や企画展の展示をし、県民に文学に親しんでもらつことが大きな仕事ではあるが、これらを実施していくための文学資料の収集、そしてその資料を将来に引き継いでいくための保存、また、それらをどのように活用して行くのか等の研究もまた大きな仕事であるといえる。

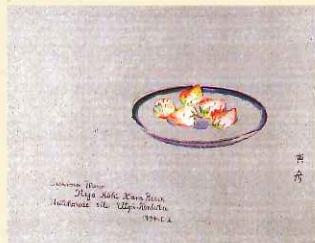
このようなかで、平成18年度から文学館も指定管理者制が導入されたが、導入を検討する中でどのような評価システムを作るかが大きな課題となつた。地方財政が厳しくなってきた中で指定管理者の導入は当然のことではあるが、コスト削減を図ることを目的とするだけでなく、文学館を設置した目的をもう一度じっくりと見据え、県民誰もが納得できる適切な評価システムができることを願うところである。

私たち関係者も目的達成のため全力で努力する所存である。

### 好きなもの いちご、コーヒー、花、美人、懐手して宇宙見物

# 常設展虫ぬがね

寺田寅彦（一八七八～一九三五）



「いちご図ふろしき」は、寅彦葬儀の香典返しに色紙を原画として染められたものです。

土佐弁では「じ」と「ぢ」の発音が違うので「藤」を「ふぢ」と言い分けることができます。

少年期を高知で過ごした寅彦は、晩年まで土佐弁なまりが残っていたそうなので、この詩を寅彦の朗讀で聞いてみたい気がします。

寅彦は、多方面にわたる物理学研究を行い、隨筆や俳句、詩歌など芸術にもその才能を發揮しています。科学と芸術の共存について寅彦は「生まれたままの人間はみんな詩人であると同時に科学者である。殊に、田舎の汚れない天然の中に育まれた子供はそうである」(※)と書いています。長じてなお科学と芸術が共に美しい真なるものとして一体であつた寅彦にとって、高知で過ごした子供時代はどの様に影響していたのでしょうか。晩年の隨筆には高知のことを書いたものが増えてきています。

寅彦の眼差しをとおして描かれた高知をこの夏は読んでみませんか？

※『忠雄短編集』「ほしがき」より



1



寅彦の書いたローマ字の詩  
「六月の晴れ」には、藤を  
「ふぢ(ひだり)」と綴っています。  
現在、藤は「ふじ」と書きますが、  
花が風に散る様子「風散(ふぢ)」  
が名の由来です。

## 資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

『清水峯雄第一全詩篇集』

一〇〇六年一月 A5版四五二頁  
清水峯雄著 西村謙写堂



受贈報告（平成十八年三月～五月）敬称略  
▼福本明美・「福本明美詩集」ぶるん 福本明美著刊  
新聞100年史記録集 高知新聞社編刊  
▼豊島未来・「土佐の女流俊英歌集」豊島未来著刊  
高知新聞企業出版部編刊  
会編刊  
■市原麟一郎・「(子どもに語る)戦争た  
いけん物語 第2集」いのち羽ばたく空 市原  
麟一郎著リーブル出版  
そして「それから」秋田律子著刊  
専門学校「おはなしびっくりば」高知福祉  
研究教育の動向 高知大学理学部編刊  
専門学校創作童話集No.16 高知福祉専門学校  
編刊  
▼高知大学理学部・「高知大学理学部の  
研究教育の動向 高知大学理学部編刊」  
知ペンクラブ・「高知文芸年鑑19号」高知文芸  
年鑑編集委員会編 高知ペンクラブ

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの  
資料を寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

著者は、一九三一年（昭和6）高知市生まれ。  
四九年高知市役所に就職、五二年から高知市  
民図書館で草創期の図書館活動に尽力しま  
した。七一年から高知市立中央公民館に勤務、  
七三年から八〇年まで館長を務めるなど社会  
教育の仕事に長く携わりました。  
八九年に定年退職。

公務の傍ら詩作を始め、五一年十一月島崎  
曙海（一九〇七～一九六三）主宰の詩誌「蘇鉄」同人  
となり、詩「夜」を「蘇鉄三九号」に発表。六二年  
四月に猪野睦等と「塩岩」を創刊。二〇〇三年  
（平成十五）十二月「塩岩」終刊後二〇〇五年  
十月には猪野睦と共に詩誌「花粉帶」を創刊  
するなど詩人としての活動を続けてきました。

また、六三年から現在まで高知文学学校の講師、  
七一年に「高知ペンクラブ」を結成し初代の事務  
局長に就任。八〇年からは「朝日新聞高知詩壇」  
の選者を務めるなど高知県文学界発展のために  
大きな役割を果たしてきました。

『清水峯雄第一全詩篇集』には、これまでの  
創作活動における全詩篇、百八十六篇が編年  
体にまとめられ詳細な「年譜」とともに収録され  
ています。著者は「あとがき」の中で「…恥ずか  
しさは残るもの」「僕の後ろの道」としての詩篇  
を集めて「区切りし」これまでの「生きた証」とし  
て残すことにした。…と詩集刊行への思いを  
述べています。

# 常設展虫がね

清岡卓行（一九二二～一〇〇六）  
きよ おか たか ゆき

二〇〇六年六月三日、日本芸術院  
会員の作家で詩人としても知られ  
る清岡卓行さんが死去されました。

清岡さんといえば大連への思いを  
抒情的に描いた『アカシアの大連』  
で芥川賞を受賞しています。

ご両親は高知出身です。日本人も  
生まれは中国の大連ですが、本籍は  
長く高知県でした。一九四三年の徵  
兵検査で、初めて高知の土を踏み、  
一九七二年に来高したときには、  
朝日新聞に「ふるさと土佐」のエッセ  
イを連載しています。

清岡さんは、もともと詩人として  
出発しており、処女詩集『水つた焰』  
ほか『幼い夢』や『通り過ぎた女たち』  
など独自の詩世界を作り上げました。

『円き広場』で芸術選奨文部大臣賞、  
『パリの五月』で詩歌文学館賞を受賞  
しています。また、『手の変幻』など  
多くの評論も残されています。

一九九九年には、一九二〇年、三十  
年代のパリを舞台に画家藤田嗣治、  
詩人金子光晴らの芸術家群像を描いた



文化への功績から、紫綬褒章、勲三等瑞宝章を  
受章しています。



# 企画展紹介

## 土佐の高知の文学探訪 展



…… 最近開催された企画展をご紹介します。……

**開催期間：平成18年5月25日(木)～6月30日(金)**

NHK大河ドラマの原作「功名が辻」（司馬遼太郎）は初代土佐藩主・山内一豊を主人公にしていますが、高知が舞台となったり高知ゆかりの人物が主人公になった文学は数多くあります。

展覧会では、そんな文学作品にスポットをあて、パネル展示を中心として、映像コーナーや、手にとって読むことができるコーナーなどにより高知の文学を多面的に紹介し、また、文学館から歩いて行ける周辺の文学碑

など、文学学者と縁の深い場所の紹介もしました。

◀ 文学散歩風景。

参加された方は「いつも通っている道にこんな碑があったとは！」と驚かれしていました。



▲ 展示室の様子

# イベント紹介



寄贈記念  
宮尾登美子展



▶ 大盛況の会場風景

…… 最近開催された催事をご紹介します。……

4月8日(土)～5月17日(水)に開催された寄贈記念宮尾登美子展～宮尾先生 ありがとう～の関連イベントとして4月30日(日)に「琵琶と語りを楽しもう」が開かれました。

演奏と朗読をしていただいたのは、宮尾先生がただ一人「宮尾本 平家物語」の演奏を許可された日本音楽集団筑前琵琶奏者、田原順子さん。

「『宮尾本 平家物語』の世界をまた違う形で楽しめた！」と大勢のお客様に喜んでいただけました。



◀ 素晴らしい演奏を披露して  
くれた田原順子さん。



応募  
問い合わせ先

〒781-8123

高知市高須三五三-1  
(財)高知県文化財団内  
高知県芸術祭文芸賞係 あて  
TEL 088-866-8013

- ・ご記入いただく個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用いたします。
- ・応募作品は返却しません
- ・ご記入いただいた個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用いたします。
- ・文字は楷書で読みやすく表記
- ・短歌・俳句・川柳は官製ハガキで応募
- ・原稿用紙の場合は、1画面に1文字を記入
- ・氏名(ペンネームがあれば併記)、現住所、電話番号、年齢、職業を明記

高知県芸術祭  
文芸賞作品募集！

平成18年度高知県芸術祭では、  
「第35回文芸賞」の作品を募集します。

【公募作品部門】

・短編小説 一人一編400字詰原稿用紙で10枚以内

・詩 一人一編400字詰原稿用紙で2枚以内

・短歌 一人3首以内

・俳句 一人5句以内

・川柳 一人5句以内

【募集期間】

・平成18年9月1日

・平成18年10月31日 (当日消印有効)

# 企画展 案内

## 大河ドラマ功名が辻 特別展 山内一豊とその妻 平成18年7月15日(土)~8月31日(木)

観覧料：一般1,000円(前売券800円)※高校生以下無料

開館時間：午前9時～午後6時まで  
(※会期中 休館日なし)

NHK大河ドラマ「功名が辻」と連動して開催する特別展で、卓越した時代感覚と器量で土佐の国主に昇りつめた一豊や夫人の人となりを、全国から集められた豊富な資料によって、その時代背景とともに紹介します。

特別展図録 2,200円

### 寄贈記念「宮尾登美子の世界IV」

作家への道のり～「村芝居」「連」習作の数々～

平成18年9月15日(金)～10月29日(日)

場所：文学館常設展示室2

観覧料：350円(常設展含)



宮尾先生が三十六歳の時、婦人公論女流新人賞を受賞した『連』を中心に、作家として脚光を浴びる以前の習作原稿の数々をご紹介いたします。



次回は 「土佐藩の家臣たち」  
9月16日(土)～10月15日(日) 観覧料：一般200円  
文学館2階 企画展示室にて

## 高知の文芸同人誌展

平成18年10月1日(日)～12月17日(日)

場所：文学館ホール

観覧料：350円(常設展含)



戦後～80年代を中心に高知の文芸同人誌活動の軌跡を追い、高知の文学活動の諸相を紹介いたします。

※休館日：年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

ただし、9月1日～14日は展示入替のため臨時休館します。

# イベント 案内

文学館 朗読の集い  
「功名が辻」の世界を  
耳で楽しんでみませんか。

日時 8月19日(土)

午後2時～4時

場所 高知城ホール

入場  
無料

功名が辻を聴く



朗読：文学館カルチャーサポーターの皆さん  
※参加希望の方は直接会場にお越しください。

## 第9回 儿童生徒文学作品朗読コンクール

審査日程

◆地区審査(公開) 県内3会場

<安芸会場> 安芸市民会館 8月21日(月) 午前10時～

<大方会場> 大方あかつき館 8月23日(水) 午前10時30分～

<高知会場> 高知城ホール2F 8月25日(金) 午前9時～

◆県審査(公開) 表彰式・記念講演会も開催！

会場：高知城ホール(4F多目的ホール)

日時：11月26日(日) 午後1時～

地区審査で選出された児童生徒の公開審査  
および表彰式・記念講演会を開催します。



**利用案内 基本データ** ※山内展開催期間中は、午後6時まで開館。また、9月14日(木)までは文学館常設展示をお休みいたします。

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)

休館日 なし

観覧料 一般350円

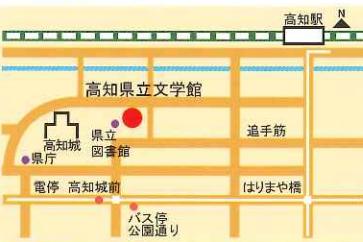
特別企画展のあるときは、料金が変わります。  
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

なし。ただし近辺に有料駐車場があります。  
ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

## 交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立  
文学館

〒780-0850  
高知市丸ノ内1丁目1-20  
電話 088-822-0231  
FAX 088-871-7857